新井佐市 編

スポーツ柔道新聞（スポーツタイムス）

1950年〜1953年

企画責任編集・解説　矢野裕介（愛知淑徳大学教授）

全3巻　スポーツ柔道新聞 第1号 〜（改称）スポーツタイムス 第2号〜第36号　※第13, 15, 29号欠

電子書籍

プラットフォーム：丸善雄松堂（MeL）、紀伊國屋書店（KinoDen）

同時アクセス1＝本体48,000円（税込52,800円）　ISBN978-4-86670-163-9

※同時アクセス3はプラットフォーム、または弊社へお問合せください

分売

第1巻（占領下：1950年3月〜1950年12月）　第1号〜第10号
本体15,500円（税込17,050円）　ISBN978-4-86670-164-6

第2巻（占領下：1951年〜1952年4月）　第11号〜第25号　※第13、15号欠
本体17,000円（税込18,700円）　ISBN978-4-86670-165-3

第3巻（独立後：1952年5月〜1953年2月）　第26号〜第36号　※第29号欠
本体15,500円（税込17,050円）　ISBN978-4-86670-166-0

オンデマンド書籍

本体52,800円（税込58,080円）　ISBN978-4-86670-167-7

※原本はタブロイド紙判ですがA4判に縮小されています
※受注制、納期は2週間〜1カ月かかります
※電子書籍と違って分売はできません

好評関連書

格闘武術・柔術柔道書集成　全Ⅲ回

民和文庫研究会編　企画・責任編集者　中村民雄、石井隆憲

第Ⅰ回 明治期の逮捕術・柔術柔道書　全6巻

本体105,000円（税込115,500円）ISBN978-4-86670-043-4

明治維新後、治安維持の担い手は武士から警察組織に委ねられた。江戸時代の捕手・捕縄や、武士の行っていた各種体術・古武術などが整理され柔術・柔道が確立されていき、あるいは警察の逮捕術に発展していった。

第Ⅱ回 大正期の護身術・柔術柔道書　全7巻

本体124,000円（税込136,400円）ISBN978-4-86670-051-9

大正期に入るとテニス・陸上競技・水泳など、競技スポーツ界で女性が活躍するようになり、体育・運動熱が一段と高まった。その反面、武術・武道の世界では競技化を諫め、形を応用した体育・護身術として行われた。それは、学校・警察から海外へも普及していった講道館柔道とて例外ではなかった。

第Ⅲ回 昭和〈戦前期〉の格闘武術・柔道書　全8巻

本体153,000円（税込168,300円）ISBN978-4-86670-082-3

昭和（戦前期）に入りスポーツ界は、国際水準に達し急速に成果を上げるとともに、アジア初のオリンピック開催が決定した。また、武道の中にも空手や合気道といった新しい種目が芽を吹きだした。しかし、昭和13年(1938)5月、嘉納という巨星が落ち、オリンピック返上とともに国際協調を旨としたスポーツや柔道が否定されだした。国防力としての「肉弾体武」を謳った稲葉太郎が分派活動を起こし、講道館は分裂の危機を迎えた。

株式会社 クレス出版　〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町 14-5　メローナ日本橋 704
Tel: 03-3808-1821　Fax: 03-3808-1822　e-mail: m-shibata@kress-jp.com

新井佐市 編

スポーツ柔道新聞（スポーツタイムス）

1950年〜1953年

企画責任編集・解説　矢野裕介（愛知淑徳大学教授）

全3巻

〈幻の柔道新聞〉原本を入手！

柔道・剣道・武道・スポーツ史の研究者、
体育・スポーツ・健康学部学科のある大学図書館、
すべての格闘技愛好者へ！

スポーツ柔道新聞 第1号　1950（昭和25）年3月15日発行

株式会社 クレス出版

武道史上において空白期とされてきた占領期を含む 1950年代前半のスポーツとしての武道の実態を伝える一級史料

〈幻の柔道新聞〉原本を入手！

戦後GHQ占領下において、軍事色を一掃するという理由から禁止された武道は、スポーツとして生まれ変わることでその命脈を保った。しかしながら、社会体育分野におけるスポーツとしての武道の存続状況やその実際については、史料的限界によって、十分な研究が及んでいない。

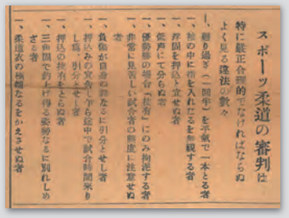
CCD（民間検閲局）の検閲が解かれて間もない1950年から1953年まで定期発行された本紙は、占領下における「スポーツ柔道」をはじめとする「スポーツ闘技」の実態をダイナミックに伝えている。正史に記載されていない大会記録や先行研究を覆す新事実も多数散見されることから、本書は今後の武道史における空白期の研究を牽引する原動力となるであろう。

編集発行人
新井佐市
（1908〜1967）

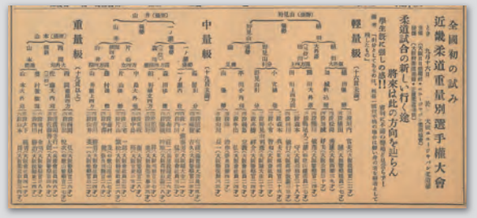
経　歴
大日本武徳会武道専門学校卒（第十七期、1931）
兵庫県立龍野中学校教諭（1937）
妻鹿講武館館長（1947）
姫路柔道協会理事長（1955）など歴任
段位＝大日本武徳会、柔道教士（1937）、柔道六段（1941）、柔道審議会七段（1948）、講道館七段（1966）

愛知淑徳大学、矢野裕介研究室蔵

GHQ 占領下における武道のスポーツ化とその実際



スポーツ柔道のルール化に向けて
スポーツ柔道新聞 第1号
1950（昭和25）年3月15日



本邦で初めて体重（重量）別を採用した大会の実施
スポーツタイムス 第19号
1951（昭和26）年9月15日

海外に先んじて始められた女子柔道の競技化
スポーツタイムス 第14号
1951（昭和26）年4月15日

スポーツ剣道への試み
スポーツタイムス 第5号
1950（昭和25）年7月15日

スポーツ空手への試み
スポーツタイムス 第4号
1950（昭和25）年6月15日

柔道正史で語られなかった貴重記録

不遷流四世　田邊又右衛門一代記　全28回（各号連載）
スポーツタイムス 第11号
1951（昭和26）年1月15日

刊行のことば

愛知淑徳大学教授　矢野 裕介

終戦80年を迎えるいま、歴史をみつめ、武道の今日までの歩みを振り返ってみると、GHQ（連合国軍最高司令官総指令部）による占領下においてはそれが禁止され、以後「スポーツ柔道」、「スポーツ剣道」というように、そのスポーツ化が図られ、実施されていた時代があった。戦後GHQが行った日本民主化政策は多岐に及ぶが、とりわけ教育分野においては戦時体育から民主的体育への変革が目指されなければならなかったからである（山本礼子，2003）。加えて、従前それを統轄していた大日本武徳会が解体となったことは周知の通りであるが、一方で、学校武道と大日本武徳会以外の社会体育分野における武道の存続状況については、これまで詳らかにされることはなかった。確かに近年において、谷川健司（2021）は、プランゲ文庫（占領政策の一環として1945年から1949年にかけてCCD（民間検閲局）がおこなったメディア検閲のために集められた出版物で構成されている）に所蔵されている雑誌記事に依拠し、1949年秋頃までは「新たなスポーツとして生まれ変わったことを強調しつつ、剣道（および柔道）が日本各地で行なわれていた」ことを指摘しているし、坂上康博（2016）においては「各府県の警察史、各府県市町村の武道史、連盟史、道場史、武道雑誌などに掲載された関係者の証言や回想録」の分析と、関係者への聴き取り調査を通して、剣道の存続状況（＝スポーツ化、芸能化）について明らかにしているが、これらの研究は主として最も厳しい制限を受けた剣道に照準が定められていること、また史料的限界もあって、1950年以降については十分な分析が及んでいないことから、GHQ占領下の社会体育分野における武道の全貌は未だ不明な部分が残されているといえよう。

ここに復刻する「スポーツ柔道新聞」および「スポーツタイムス」は、編集発行人である新井佐市（1908–1967）によって、1950年3月15日に創刊（第1号）され、1953年2月15日に終刊（第36号）となったタブロイド判の定期新聞である。この発行期間からも明らかなように、当該新聞の最大の特徴は、これまで武道史上において空白期とされてきた占領期を含む1950年代前半のスポーツとしての武道の実態を具体的に伝える一級史料であり、その原本は管見する限り他に見当たらないという点に尽きる。

その内容をいくつか紹介すれば、1947年3月から1949年12月までの柔道の「試合記事」（第1号）、「日本最初!!兵庫縣廳内各部対抗柔道優勝大会」（第2号）、「全国弓道大会」（第3号）、「兵庫縣剣道競技連盟姫路本部發會式並に剣道大會」（第4号）、「社会人柔道対抗 全大阪―京都戦」（第6号）、「終戦後最初!!對校柔道戦」（第8号）、「第三回全國警察柔道大会」（第9号）、「九州産業人柔道大會」（第14号）、「阪神、姫路対抗剣道競技大会」（第17号）をはじめとする各地の大会結果を伝える記事に加えて、「スポーツ柔道の審判は」（第1号）、柔道の「点数制はいかが」（第1号）、「スポーツ剣道を聴く」（第5号）、「（剣道）◎撓競技法」（第6号）、体重別を初採用した「全国初の試み近畿柔道重量別選手權大會」（第19号）などの見出しがあるように武道の具体的な実態（＝スポーツ化）を示す記事が並んでいる。また独立後においては、1952年6月の「講和記念全國親善劍道大会」（第28号）の開催を契機として、「武徳会復活！」（第28号）、「日本武徳会設立の趣意」（第30号）、「新『武徳会』の創設へ」（第34号）といった、大日本武徳会の再建運動に関する記事も確認できる。その他に本紙では、砂本貞筆録による「口述實傳〔不遷流四世―引用者注〕田邊又右衛門一代記」が第3号より連載されていることにも注目しておきたい。戦前、講道館柔道の強豪たちを次々と撃破した田邊又右衛門（1869–1946）の活躍は、これまで『大日本柔道史』をはじめとする柔道正史（＝講道館柔道史）ではほとんど語られることはなかったが、その点を含めた戦前の柔道史の一側面を伝える貴重な記録が原文のまま初公開されているからである。なお偶然にも、本新聞の旧蔵者は田邊の実弟、中山英三郎であった。

最後に、少し長くなるが、ここに当該新聞を発刊した新井の願い（目的）を引用することをもって、刊行のことばを結びたい。

柔道愛好者の御希望に依りまして愈々「スポーツ柔道新聞」は目でたく発刊と成りました、柔道は過去に於ける所の柔道ではなく、改らたに生まれ、その名も「スポーツ柔道」として出発したわけであります、我々は斯く考える時連合軍当局の厚意に感謝せずにはおられません、愛好者におかれましてはその意を解し正しい「スポーツ柔道」を修業し、そして「スポーツ・スプ(ママ)リット」なるものを深く体得され現在の情勢を切り拓いてゆくことを切にお願い致します、此度発刊しました「スポーツ新聞」の内容は柔道を中心としてボクシング、フエツ(ママ)シング、空手、日本奉(ママ)法〔、剣道、レスリング―引用者注〕等々スポーツ闘技全般なるものを普及宣傳せしめ順を追い、多載に渉り読者にお知らせする新聞であります、本社は読者と一心同体となり進んでゆくことを信条としています、就きましては皆様も色々質問なり或は御意見等其他かず山程あることと信じます、その御相談に対し本社は生意をもつて御答えする覚悟もありますからどうぞ皆様遠慮なく奮つて御投書下さいませ、眞に新聞は読者有つての新聞であります。…中略…さあ！皆さん自己をハッキリと掴み、げん氣に、毎日の稽古に精進しようではありませんか。編集員一同も今後皆様と共にスポーツ柔道をいやが上にも発展向上せしめ、連合軍当局の厚意に答えるつもりであります。